

琵琶湖を中心とする県内の 自然・環境を守る

びわ湖自然環境ネットワーク
代表幹事 寺川 庄蔵

はじめに

ことしもまた琵琶湖に赤潮が発生しました。同じ時期、南郷洗堰を流れる水が付近一帯に異臭を放ち始めました。いまや夏は、近畿地方の各家庭に「琵琶湖の臭い水」を届ける季節となってしまったのです。

もう何年もの間、琵琶湖は、さまざまな信号を用いてその病苦を訴え続けてきました。南湖にはアオコが発生し、危機的な状況を迎えています。北湖も決して安心できません。

私たちは、その信号を正しく受取っているのでしょうか。病める琵琶湖の回復のため、対症療法でなく、根本の原因を断つ努力を十分に払っているのでしょうか。そもそもそれらの信号は、琵琶湖を、水・環境資源とのみ考え、開発に熱中する行政・企業への警告ではないのでしょうか。

1972年に開始された琵琶湖総合開発計画は、今年再延長され5年間継続されます。さらに90年には、国の総合保養地域整備法（リゾート法）のもとに「琵琶湖リゾートネックレス構想」が承認され、大規模なリゾート開発が実行に移されています。これらの開発計画を後押しするように、「びわこ空港」、「第2名神」、「ダム建設」などの大型プロジェクトが控えています。こうした開発・汚染から琵琶湖を守るべき措置として制定された琵琶湖富栄養化防止条例(79年)、ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例（84年）、ヨシ群落保全条例・ごみの散乱防止に関する条例（92年）が、どれだけ効果があるのでしょうか。「リゾートネックレス」が琵琶湖にとって「ダイネックレス」とならない保証はどこにもありません。

琵琶湖とそれを取り巻く自然と環境の現状

それでは、滋賀県下における自然と環境をめぐる現状をもう少し詳しくみて

みたいと思います。

琵琶湖の水質

7月29日の県公害対策審議会で報告された昨年一年間の琵琶湖と河川の水質調査結果によると、比較的良いとされてきた琵琶湖の北湖の水質が、過年度に比べると少し悪い値であったが前年度並としています。北湖はCOD（化学的酸素要求量）の年間平均値は2.4PPMで、前年値より0.1ポイント高く、過去10年間で最高です。窒素、リンも前年値をわずかに上回り、透明度は前年と同じ4.7メートルでした。一方、南湖は、COD、窒素、リンとも前年値並みか、わずかに下回り、透明度は1.7メートルと前年値より10センチ良くなっています。

また、河川は25カ所中18カ所がBOD（生物化学的酸素要求量）の環境基準以下で、前年度、過年度並であった。としています。

しかし、こうした化学的データも、琵琶湖の水質を全面的にとらえているとは言い難く、漁民をはじめ関係者の証言から、水質悪化はもっと深刻ではないかと心配されます。

琵琶湖の周辺

琵琶湖の水は、すべて周辺の山々を基点にして平野部の田畑、町と村の集落を経て琵琶湖に流れこみます。この集水域の状況によって琵琶湖の水がどう変わるかが決まります。琵琶湖の周辺では今何が行われているのでしょうか。

<山岳部>

まず第一に、スキー場の新、増設がすすんでいます。30年前までマキノと伊吹山の2カ所しかなかったスキー場が、現在10カ所に増えて年々その規模を拡大しています。最近のスキー場は、スキーヤーのニーズに応えるために施設を大型化し、大規模に自然林を伐採し土地を削って造ります。シーズンオフには地肌が露出して醜い姿をさらし、維持管理に使う肥料や、し尿、雑排水によって清流が汚染されています。ダムの建設も至る所で行われています。特に現在進められている丹生ダムと木之本町揚水発電所ダム、それに永源寺第二ダムは非常に大規模な計画で、水質悪化と自然破壊は莫大なものになることが予想できます。林道も各所で工事が行われ、森と溪谷を壊しています。主に山間部を通る第二名神の建設計画も周辺住民の声を無視して進められています。この計画は、森林破壊、水質汚染に加え、騒音と排気ガスの被害が心配です。

こうした開発に加えてリゾート開発があり、豊かな自然が壊されて似かよった人工的な休養地に変えられています。さらに、リゾート法ができるまでは手の付けにくかった保安林までが「多目的保安林総合整備事業」によって安易に開発されてきています。

このように、自然度の最も高い山岳地域から緑と清流がどんどん失われてきています。

<丘陵部>

ここでは、近い将来自然がすっかりなくなるような勢いで開発が進められています。

ゴルフ場、空港、大レジャーランド、工業団地、宅地造成、産業廃棄物処分

場、ごみ処理場……。全国的に問題のゴルフ場は、滋賀県でも大きな問題です。県は90年12月にゴルフ場を凍結すると発表しましたが、予想した通り駆け込み申請で、39カ所(増設含む)で計画され、これらすべてが完成すれば凍結時(32カ所)の倍以上の59カ所、面積で7900ヘクタールとなります。

「びわこ空港」は、広大な自然林の丘陵地をつぶして計画され、需要予測や騒音などの科学的データも不十分で県民の理解も得ていないのに、地元の強い反対を押し切って強引にすすめられています。また、大レジャーランドは、名神竜王インター近くの丘陵地に東京ディズニーランドを上回る規模で計画されています。この地域は、昨年県が県立自然公園の見直しをした際規制を緩和した所でもあります。産業廃棄物処分場、ごみ処理場は、現在の消費文明を背景に県下各地で問題となっています。

〈平野部〉

滋賀県南部では都市化の波が急速に押し寄せ、市街地では高層ビルが次々と建設され、特に高層マンションは周辺住民の環境悪化を招いています。地方におけるリゾートマンションは環境悪化に加え景観を破壊しています。

市街地周辺の変わり様は激しく、大型店舗の進出に伴う旧商店街の崩壊とともに、農地をつぶしての宅地造成が大変なスピードで進行しています。

自然の残っていた農村部や北部地域でも、リゾートを中心とした開発によって、景観の悪化をはじめ、災害の危険、風害、日照権、交通渋滞など、自然破壊とあわせ生活そのものが脅かされています。

また、水田への農薬空中散布は、近畿で実施しているのは滋賀県のみとなっています。

〈湖岸部〉

湖岸は、県民にとって昔から生活と直結し潤いをもたらしてきましたが、近年は企業の占有化が進み、浜辺に立ち入ることさえ限られてきています。自然のなごさも、湖周道路の建設等によって50%を切ったとも言われています。

さらに、リゾートの波はこれらを加速し、別荘やマリナーが増え、ヨシ原など自然の生態系の破壊がすすんでいます。夏になると人工的に造られた湖岸には水上バイクが集まり、騒音とゴミをまき散らし、水泳も安心してできない状況となっています。

また、湖岸の干地農地までつぶしてゴルフ場にする計画がすすんでいます。

環境ネットの活動

私たちは、湖国滋賀県の自然と環境を守るため、90年7月に「びわ湖自然環境ネットワーク」(略称・環境ネット)を結成しました。12団体と3人の個人会員でスタートした環境ネットも、現在24団体と25人の個人会員(92年11月現在)となり、さまざまな分野で自然と環境を守るため活動している団体と個人が加

入しています。

環境ネットの目的は、「滋賀県の自然と環境を守るために、住民運動の意見交換及び情報交換を中心に活動し、行政と政党から独立した組織として、一致する目標では共同行動を行う」（運営基準から）としています。

これまでの取組みとしては、シンポジウム3回、学習会5回、現地調査会7回、住民集会1回、近畿レベルの住民会議1回、を実施するとともに、「湖国の自然と環境破壊の現場から」と題した報告書を90年度版（1号）500部、91年度版（2号）1,000部を発刊し、県内ですすむ自然と環境破壊の実態をまとめ発表してきました。現在92年度版（3号）の編集をすすめています。また、NWニュースを毎月発行し、各会の活動状況や県内の自然環境をめぐる動きを掲載しています。

今年の6月には、ブラジルで地球サミット「環境と開発に関する国連会議」が開かれ、THINK GLOBALLY, ACT・LOCALLY（地球規模で考え、地域で行動を）は、世界中で自然環境保護の合い言葉となり、日本においてもこの流れが大きく広がって、運動のネットワーク化がすすんでいます。

しかし、87年に成立したりゾート法に基づく開発の波は日本列島を襲い、滋賀県下においても先に述べたとうり例外ではありません。もし、このまま開発が進めば、琵琶湖の美しい水をはぐくんできた自然が失われ、琵琶湖は死の湖への道をたどるに違いありません。

琵琶湖の水は、近畿1,400万人の飲料水をまかなっています。

滋賀県における自然環境を守ることは重大な意味を持っています。

地球規模で考え、地域で連帯して行動を!!この言葉を指針に、自然と環境を守るため、ネットワークの輪をさらに大きく広げていきたいと思います。



▲萩の浜水泳場に打ち寄せたコカナダモ。(高島町) 91.10.16



▲琵琶湖畔に植えられたヤシの木とゴミ (中主町) 92.8.15



▲水田への農薬空中散布 (安曇川町) 91.8.3



▲琵琶湖淡水真珠の調査（草津市）91.9.1



▲“輝け琵琶湖” 近畿の水源を考える住民会議（近江八幡町）92.8.29～30
※200名参加